

原爆詩人峠三吉の文学資料保全の試み

好村 富士彦

広島大学文学部

広島大学平和科学研究センター兼任研究員

**An Attempt to Preserve the Literary Materials  
of the A-bomb Poet Sankichi Toge**

Fujihiko KOMURA

Faculty of Literature, Hiroshima University

Research Associate, Institute for Peace Science, Hiroshima University

あの1945年8月6日の当日、広島にいて原子爆弾の悪魔的な威力と、それによる酸鼻を極める被害を身をもって体験した人びとの中に、文学を自己の生涯かけての仕事とした人びとがおり、その人びとがその体験を文学作品として残しておいてくれたことの重要さは、その後の平和の問題を考える上でいくら強調してもし足りないほどである。

とりわけ原民喜<sup>1)</sup>、大田洋子、峠<sup>とうげ</sup>三吉<sup>さんきち</sup><sup>2)</sup>の3人の名は現在ではよく知られており、彼らの作品はすでにさまざまな形で公刊されていて、多くの人びとに平和の大切さを心に刻むのに大きな役割を果たしてきたし、現在も果たしている。しかし文学研究者の立場から見ると、彼らの仕事のすべて、つまり文学作品のみならず日記、書簡、生原稿、メモなど、彼らの文学資料全体を学問的に、言いかえれば文献学的に正当に扱っているかということ、その点は大変不十分で、むしろ憂慮すべき問題が多々あると言わねばならない。

これら3人の中で一番恵まれているのは原民喜であって、友人など身近な人に山本健吉、佐々木基一のような優れた文学研究者・文芸批評家がいたせいもあって、青土社から1978年に彼らに長光太が加わった編集委員によって刊行された『原民喜全集』全3巻、別巻1はほぼ完璧な出来とあってよい全集である。しかし民喜が被爆当日持っていて、その翌日野宿しながら書いた被爆の記録メモを含む手帳、さらには初期の家族で出した文芸誌『ポグギー倶楽部』1、3、4号など一部しかない手書きのものなどは広島市に住む甥に当たる原時彦のもとに保管されてあるが、前記の手帳被爆メモなどは鉛筆で書かれていて、ほとんど判読し難くなっているのが気がかりである。こういうものは図書館がオリジナルをもとにレプリカを作り、オリジナルは図書館の湿度・温度を一定に保った特別保存室に入れておくことが望ましい。

大田洋子については、一昨年自死した長岡弘芳の努力によって『大田洋子集』全4巻(82年 三一書房)が出されていて、彼女の主要な作品はともかくもこれで読めるようになったが、戦前からプロの作家として活躍していた彼女の仕事の全貌をうかがうことはとてもできない。(なお幸いにも彼女の著作目録が浦西和

彦によって作られている。「大田洋子著作目録」【關西大學文學論集】第27巻第1号、昭和52年9月、關西大學文學會)

峠三吉に関しては、生前に出されて彼の名を不朽なものにした【原爆詩集】(52年 青木文庫)を始めとし、且原純夫編峠三吉全詩集【にんげんをかえせ】(70年 風土社)、【峠三吉作品集】上・下(75年 青木書店)、増岡敏和編詩集【にんげんをかえせ】(82年 新日本文庫)という形で、彼の詩作品や童話・小説のほぼ全部と日記・覚え書きにいたるまでが刊行されている。そのかぎりでは大田洋子の場合よりは恵まれていると言えるが、これから見てゆくように文献学的に必ずしも問題なくはないのである。

## 2

一般に出版された文学作品を正確に賞味するためには、ましてそれを文芸学的に研究する場合はなおさらだが、テキストの批判が先ず第一に必須の事柄である。つまりひとつの詩の作品が全集や作品集に載っている場合、その詩のテキストは何に依拠しているか、それが著者の原稿からじかに取ったのか、初出の雑誌に拠っているか、最初の詩集からそのまま取ったのかを明らかにすることが大切である。このテキストの表示形態がいくつもある場合は、その間の異同を確かめ、さらにそれらの各稿の古さの順序を確認せねばならない。それによって著者の推敲の跡をたどることも可能になる。この場合著者の手になる草稿があるのとないのでは、大変な違いがあることは、言うまでもないことである。

峠三吉の文学資料の保管の状況に関しては、かなり以前から関係者の間で危惧され、その早急な対処の必要がささやかれていた。

それには以下のような事情がある。

峠三吉には子供がおらず、彼が36歳の若さで1953年に他界した後、残された和子夫人は原爆症から来るものか病気がちで、気が弱くなっていて、1965年に峠の詩碑が何者かによって赤ペンキで汚されたことにショックを受けて自殺した。したがって峠の詩稿のノート、日記などをはじめとする主な遺品は兄の峠一夫のもとに移り、一夫が1986年に死去した後は、その子息鷹志に帰属することになった。

しかし鷹志は仕事の上で日本を離れることが多く、東京に住む増岡敏和にそれらの遺品の管理はゆだねられている。

このように転々と移されてゆくうちには、いつか紛失するものも出てくる。とくに痛恨にたえないのは、何時の段階か分からぬが、峠の作品の中でもっとも重要な『原爆詩集』の清書原稿が行方不明になったことだ。峠は普通の400字詰原稿用紙では長い詩行だと次行にまわさねばならず、実際に印刷されたときの言葉の配列がつかめない、といって、B4の白紙に自分で定規を使ってたてに40字くらい書けるようなます目にした原稿用紙をつくり、それにきれいに書き込んでいった。それは彼が西条の国立広島療養所に入っていた時期（1950年12月から翌年4月まで）のことで、丁度同じ所の隣の病棟で療養中だった私は、その中の新しい詩が出来上がる毎に読まされ、感想を求められたのでよく憶えている。（こういう原稿の段階での文字の配列への気くばりは、峠が詩の意味だけでなく、視覚的な要素をも重視していたことを示している。）いずれにせよこの詩稿が峠の代表作のテキスト批判のためにどんなに重要かを考えると、これが失われたことがいかに手痛い損失かが改めて実感される。

### 3

こういう現状を憂えた私は、まわりの人びとに訴えて、何とか峠の文学資料の保存に乗り出さねばならないと考えた。幸い1982年の文学者の反核署名をきっかけに、「ヒロシマと文学を考える会」が組織され、その会が縁となって、平和と反核のための文学を創り、それを大切にする志を持つ多くの人びとと知り合うことができた。そういう人びとを中心に、さらにもっと広く文学愛好者と平和を関心事とする人びとの支持をえて、1987年2月「広島文学資料保全をすすめる会」（後に短く「広島文学資料保全の会」に改称。以下「保全の会」と略記する）が結成され、戦後の間もない時期の資料などの保護と、それら資料の保管と展示のための文学館の設立を訴えて、署名運動を展開した。署名は4か月のうちに6,000名を越え、同年7月14日に会の代表である沖原豊広島大学学長（当時）から荒木市長に署名簿が手渡された。

保全の会は一方では署名運動や市への陳情などの運動をすすめるかたわら、他方では実際に身近な資料の保全と調査にのり出した。保全の会は「峠三吉記念事業委員会」と協力して、8月27日峠三吉の次姉今井千栄子が広島に来たのを機に甥の三戸頼雄宅の2階に保存されていると推定される三吉関係の遺品、遺稿の整理と調査を行った。三戸頼雄は三吉の長姉三戸嘉子の息子で、和子夫人はこの家の2階で縊死した。それで平野町の平和アパートの峠の住居は無人になって明け渡さねばならなくなったとき、主要な日記や作品ノート以外のものは未整理のままこちらに移され、2階に置かれたが、頼雄は重度身体障害のため母嘉子の死後は佐伯町のひかり園で生活することが多く、2階は手つかずのままに放置されていた。

保全の会が当初考えていたよりも収穫は大きく、ダンボール箱に8杯分量の資料が発見された。中でもとりわけ長年行方不明と思われていた三吉のデスマスクが見つかったことは、関係者に強い感銘を与えた。三吉は1953年3月10日未明に国立広島療養所で左肺葉切除の手術中に死亡したが、このデスマスクは当時同所のレントゲン技師で、塑像制作の趣味のあった上田因が、そこに広島から駆けつけた三吉の友人で画家の浜本武一の協力を得て病室でとったものである。これを見ると私のように生前の峠を知る者は、峠の面影をありありと浮かべることができるほど、顔の起伏が生々しくうつしとれている。デスマスクの発見者で当日も奥さんと共に中心になって整理に当たった家田修(当時広島大学経済学部助手)は、「原稿にしては重いので、何だろうと開けてみて、デスマスクだと分かったときは、手が震えました」と私に語ってくれた。

また当日立ち会っていた三吉の姉今井千栄子は、デスマスクを手にとると、「みっちゃん！」と呼びかけ、生あるものへ語るように語りかけていたという。

また『原爆の囀』で知られる丸木位里、俊子夫妻も峠の死の床に駆けつけ、それぞれが峠の死に顔をスケッチしたが、このたびはそれらスケッチも共に発見された。

期待していたとおり、これらの資料の中から峠の肉筆の原稿が多数見つかり、その中にはこれまで発表されていないものがかかなりあった。なかでも「生」と題された未発表の詩稿は注目を集めた。

## 生

勤えと 食物あさりえと  
 出たきり帰らぬ 父をかえせ 母をかえせ。  
 疎開家屋の材木曳きに  
 隣組から学校からかり出され  
 封筒に入れわけた灰になってかえてきた  
 としよりをかえせ 子供をかえせ。  
 髪がぬけ落ち斑点がでて  
 死ぬときめられながら手当とてなく  
 ぢりぢり死なねばならなかった  
 わしを わしの命ちをかえせ。  
 蛆のように這いよりいざりより  
 うじにまみれ  
 救護所の方へ頭をむけ腕をのばし  
 死んだまま  
 そのおびただしい死体の群を  
 かたずけるひとでもなかった  
 にんげんの にんげんたちの  
 町をかえせ 生をかえせ。

これは『原爆詩集』の諸詩篇と同じような当時としては一番上質の白い紙に清書されていて、一応完成原稿と見なせる体裁をしているが、内容的には明らかに

「序」の詩「ちちをかえせ ははをかえせ……」（平和公園にある峠三吉詩碑に刻まれている詩で、一般に「にんげんをかえせ」の詩として知られているが、そういう題がついているわけではない）の原形であろうと推定しうるものである。こうして見ると、原形の方には父、母、年寄、子供それぞれの死のきっかけとなった行動が具体的に語られ、「わし」の死の状況がやはり具体的に描写されていたのに対して、後の「序」の詩では思いきってそれらを省いて抽象化してしまったが、それによってこの詩は普遍性を獲得することができ、同時に「かえせ」の言葉のリズミカルな反覆が、素朴な民話的雰囲気をかもし出すのに役立っていることが分かる。

なお同じく遺稿の中にあった早い時期の『原爆詩集』の構想メモには、この「生」の題が挙げられているが、このほかに「序詩」というのが初めに記されていて、当初峠は別の形の序の詩を考えていたらしい跡がある。

有名な「墓標」という詩の下書き原稿も見つかった。済美小学校の学童の死をうたったこの長詩は、全詩集でも作品集でも第15連の「……錆びた釘さえ／ひろわれ買われ」と「ああ 君たちは 片づけられ……」とが続けられているが、下書き原稿を見ればこの間は一行空けになっていなければならないことが分かる。

（ガリ版刷りの初版ではそれがはっきりと認められるが、青木文庫版でもそうになっているのに、そこがページの変わり目のためつい見落とされて、間違っ印刷されてしまったのだろう。）このほか「一九五〇年の八月六日」の未定稿があって、これを『原爆詩集』（青木文庫）所収のものと比較すると、第四連と第五連に当たるところが「ゆらゆら／ゆらゆら／ピラが舞い落ちる／誰かが拾った／腕が叩き落した／手が空中で握りとった／眼が読んだ／〈平和〉〈反戦〉！……」というように短く簡略なものだったことが分かる。

この調査で発見されたこれらの資料は、峠三吉の未発表作品を含む草稿、下書き、メモなど約600点、少年時代の日記・ノート35冊、書簡類約1,212点、写真約292葉など、合計3,125点にのぼった。

これら峠自身の資料とは別に、峠三吉が編纂者となり、『われらの詩』の会に結集する若い人びとの助けを借りて出した、広島の子童や市民の原爆をテーマにした詩のアンソロジー『原子雲の下より』（1952年 青木文庫）の応募原稿の入っ

た箱が見つかった。この中には本に入れられた124篇もあったが、それ以外の選にもれた未発表作品が約430篇あり、これも副次的ながら貴重な発見として多くの人の関心をひいた。峠が集めた作品は全部で1,389篇で、従ってまだ800篇余りの未発表作品があるはずであるが、今のところ手がかりはない。

## 5

保全の会はこれらの未発表資料を多くの人びとに見てもらうために、峠三吉記念事業委員会と広島市中央図書館の協力をえて、1988年7月29日から8月5日まで同図書館の中央ロビーにおいて、峠三吉没後35周年を記念して『愛と平和のパラード——峠三吉文学資料展』を開催した。正味7日間の会期中にこの展示場を訪れた人の数は2,000人を越えた。

またこの資料展に並行して市の企画調整局文化課と中央図書館の協力のもとに保全の会は今回発見された主だった資料と、東京の峠鷹志保管資料とを合わせた『峠三吉文学資料目録』を作成し、会場において関心のある人に頒布した。この目録はたて30センチ、よこ16センチの変形で、116ページから成り、表紙を峠三吉の自画像で飾ったほか、ふんだんに資料の写真も入れ、書簡などには主な内容や文言を付記してあり、各方面から好評をえたが、500部しか刷らなかつたため、すでに全部頒布されてしまった。

先の『原子雲の下より』の未発表作品については暮しの手帖社が早くから強い関心を示し、88年5月に大橋社長自ら広島まで来て保全の会のメンバーと会うという熱の入れ方を示した。彼女からこれらの詩の一部を先ず雑誌『暮しの手帖』に載せ、その後単行本として出したい旨申し入れがあり、他にも申し入れがあったが、私たちは協議の末結局暮しの手帖社にまかせることにした。そしてその年の7月末発売の『暮しの手帖』第15号8・9月号にこのうちの28篇（これには峠の未発表作品「晴れた日に」も含まれているが、この作品は『原爆詩集』「ある婦人へ」の未定稿とも見なされる）が「行李から出てきた原爆の詩」という見出しのもとに掲載された。

暮しの手帖社は「原爆の詩」の載ったこの号の発売にはとりわけ力を注ぎ、発



売当日は大橋社長自身が同社社員と共に銀座の書店の店頭に立って、道行く人びとに新しく見つかった「原爆の詩」がこの号に掲載されていることを宣伝し、その模様はテレビでも全国に放映された。

その後これらの未発表原稿を整理し、そのうち公刊に値するものを選び出す作業と、それを清書ないしワープロ化する作業にかかった。このさい選考に関与したものは池田正彦、伊藤真理子、尾津訓三、深川宗俊、文沢隆一、三浦精子、好村である。430篇の中から表現の類型化したもの、未熟すぎるもの、不適切な表現のあるものなど206篇を削って、残り224篇を暮しの手帖社に送って、最終的な選定は同社の編集部にゆだねた。また峠の未発表作品から先の「晴れた日に」とまったく知られてなかった「すべての声は訴える——序文にかえて——」をつけ加えることを要望した。後者はこれまで誰もその存在に言及したことはなかったが、資料目録作成のため東京から送ってもらった峠鷹志所属の資料の中にあったもので、400行を越す未完の長詩である。活字化のさい不注意で落としたが「——序文にかえて——」の副題とその内容から、これは『原子雲の下より』に当初峠がつけようとした序の詩の草稿であることは確かである。

この長詩の欄外に峠はかなり乱雑に、テキストの異文か注かはっきりしない言葉葉を多数記入していたが、今回の発表のさい煩瑣をいとわず全部判読して、注の形で最後にまとめておいた。終りの方にゆくほどこの注の数が増えていることは、峠が詩の形式で書きながらもドキュメンタリー的なものを重視しようと努力したことの表れである。

この長詩を散文の序文と較べると、やはり詩の方が峠がこのアンソロジーにかけた熱い想いをじかに伝える力を持っている。しかし峠のこの熱い詩情も原子爆弾をめぐる重い現実の総量にひきずられて、その想像力を十分に羽搏かせることがついにできなかった。この終りにゆくほど増え長さをましてくる注は、峠がドキュメンタリー的なものが今後重要になることを予感して、それを自己の詩世界に審美的に統合しようとしながら、ついに果たしえなかったその苦闘の跡をとどめているといえよう。

暮しの手帖社は結局私たちの選んだ224篇のうちから71篇を厳選し、それに峠の未発表作品2篇を加えて1冊のアンソロジーにまとめあげた。71篇のうち4篇

は詩の形をとらない手記である。また1篇既発表のものが保全の会の不手際で入りこんでしまった。この編集作業はボランティアから成る保全の会の態勢の不十分さと、好村の海外出張と病気のため遅滞して、結局このアンソロジーは1990年8月1日付（実際は少し遅れた）で雑誌のときと同じ『行李から出てきた原爆の詩』の表題のもとに刊行された。この本に関するマスコミの反響も大きく、中国新聞は7月18日付の朝刊に、『原子雲の下より』の未収録作品を集めた原爆詩集が近く出版される旨を記事にして予告し、さらに刊行後は文化欄（8月9日）で好村がこのアンソロジーの成り立ちのいきさつとその意義について述べる機会を作ってくれた。また朝日新聞は8月7日付の「天声人語」でこの詩集からいくつかの詩句を引用して、それらが今なお持っている衝撃力を全国の人びとにじかに知らせてくれた。

## 6

保全の会は峠三吉の文学資料を探し出し、整理・分類し、保全するさいに、次のような原則を心がけた。

### 1. 徹底した記録主義をとる。

価値があるかないかは判断しないで、峠三吉に関しているすべての資料を取り上げ、きちんと記録し、保存する。

### 2. 峠が生き、活動した時期の社会的背景や時代潮流との関連を重視する。

峠個人の自己形成過程は、その社会の動きや時代の流れと切り離すことはできないから、大きな社会的視点が必要である。

### 3. 峠の関わった運動や組織の動きも分かるように資料を生かす。

峠は詩人であると共に優れたオルガナイザーでもあった。ピラ1枚にも彼の文化運動・平和運動を实践する姿勢が反映している。また広島戦後のさまざまなサークルの機関誌等をきちんと保存しているのも驚きだった。

### 4. 峠のポジティブな面もネガティブな面もきちんととらえる。

当たり前のことであるが、峠の仕事の高さをとらえながらも、彼の人間的弱点をも隠さないことを心がける。

この峠の新資料の整理と保管に関しては、広島市企画調整局文化課と広島市中央図書館が、右の原則の趣旨に理解を示し、作業の全過程にわたって力を貸してくれた。まず個別資料それぞれのカードを作り、保存の万全を期し、さらにそれらすべてをマイクロフィルムにとって、万一字が薄くなったり、紙がボロボロになっても再現できるようにした。マイクロフィルムの総コマ数は22,050に達した。1990年9月に今井栄子より新発見の資料3,125点を、文学資料館が出来たらそちらに移すという条件をつけて、広島市に寄贈することが決まった。これと前後して池田正彦、尾津訓三、好村から関係資料の寄贈の申し入れがあり、峠関係の資料は合計3,375点になった。市ではこれら寄贈された資料の総目録を作成中で、もうすぐ上梓されるとのことである。先の『峠三吉文学資料目録』には整理が十分できていないため、目立った主要なものだけを新資料から載せたにとどまり、断簡墨跡の類は入っていない。新しい目録には峠の小さなメモにいたるまで、すべてが記載されているとのことである。<sup>3)</sup>

こうして峠三吉の新資料の発掘から保存にいたる大仕事は一段落した。右に示した原則に沿って資料にじかに当たり、整理し、分類し、照会し、吟味してみると、これまでの峠三吉の作品の出版の在り方にかなり問題があることが分かってくる。

とくに峠の全作品から手記、日記までを収めた峠一夫、増岡敏和編『峠三吉作品集』は、全集に近いその分量や性格、出版時期からいって、一番歴史的・批判的な検討を経ていなければならないのに、その期待を全く裏切っている。すでに先に指摘したように「墓標」では『全詩集』の間違いをそのまま引き継いでいるかと思うと、「絵本」では『全詩集』とは明らかに異なる個所のあるテキストを載せているが、その違いは如何なる理由で生じたかを明らかにしていない。

とくに日記に関してはスペースの関係で全部を載せられないのはやむをえないとして、その取捨には多分に編者の恣意的な選択が見られ、そのやり方のひどさには怒りを感じるよりも、あきれてしまう。その一番典型的な例をあげれば、峠の日記の1950年10月7日、8日には丸木位里、俊子（当時赤松姓）夫妻の『原爆の図』展が初めて広島で開かれたことについての記述があるにもかかわらず、これを全く載せていないことである。この広島での展示は峠のイニシアチヴで実現

されたもので、7日に丸木夫妻が来広することになっているところへ、さらに詩人の壺井繁治も急に広島へやって来て、峠の家に皆が集まり3人を囲んで歓談したことが、峠の日記には書かれている。なぜ広島の文化運動にとっても、平和運動にとっても重要なこれらの日々を削除したかを推測すれば、当時峠と同じように共産党員だった丸木夫妻はその後共産党を出ていることがその原因であろう。つまり反党分子のために峠が身を粉にして尽くしたことなどは載せられない、と考えたのだろう。しかしこの3人を囲む夕べには増岡自身も出席しており、新資料の中にあった記念写真にちゃんと写っているのだから、頭かくして尻かくさずである。<sup>4)</sup>

また同じく日記で増岡自身の名前が出ているところは、何の重要性もなくとも漏れなく収録し、増岡以上に峠と親しく、峠に信頼されていた且原純夫の名の出ているところは出来るだけ削除して、自分の方をより印象づけようとしているなど、編者としての適格性が疑われても仕方がないことが平気でなされている。

このような狭い党派性の上に立った資料の隠匿や改ざんは、峠の真の姿をゆがめて、峠の人間と思想性を卑しめることにしかならない。いまや峠三吉の文学と仕事は、平和に関心を持つ日本の、いや全世界<sup>5)</sup>のすべての人びとの共通の関心事であり、世に正しく伝えられるべき大事な文化的遺産である。私たちはその峠の真の姿を伝える資料を、峠に関心を持つ人なら誰でも研究し、参照できるような保全の会の体制の実現を試みて、ある程度実現できたのではないかと思っている。

しかし保全の会としてはこれで安心するわけにはゆかない。私たちの目標である広島文学（資料）館の設立への道ははじまったばかりといえる。私たちは次の仕事として、「大き骨は先生ならむそそのそばに小さきあたまの骨あつまれり」の歌で知られる正田篠枝の資料にとりかかる予定である。

1990年12月6日

## 注

- 1) この論文で扱う人名はすべて敬称を省略する。
- 2) 峠の名は三吉を「さんきち」と読むのが正しい。増岡敏和は峠の評伝『八月の詩人——原爆詩人・峠三吉の詩と生涯』（東邦出版社 昭和45年）で「三吉は、戸籍では「みつよし」であった。」と書いているが、戸籍に「みつよし」とか「<sup>みつよし</sup>三吉」と書いてあるはずはない。

三吉の父嘉一は兄<sup>さんきち</sup>延吉の吉をとり、三男のゆえ三吉と名付けた。当然読みは「さんきち」である。

私は峠の生前に三吉はどう読むのが正しいのか、と尋ねたところ、峠は「さんきち」が正しいのだが、歌舞伎の『恋女房染分手綱』の「重井子別れ」の段に馬子の<sup>さんきち</sup>三吉というのが出てくるので、子供の頃「馬子の三吉」と呼ばれることがあり、三吉の母がそれを嫌って「みつよし」と読みし、みずから「みっちゃん」と呼んだので自分もそれを使うようになった、と答えた。たしかに三吉も自ら「みつよし」とか、時には「みつほし」とか自分の詩のノートに書いていたので、「みつよし」を本名と思う人も出てくるし、家族の間でも「みっちゃん」と呼ぶのが普通になったのである。後で書くように千栄子も峠のデスマスクに「みっちゃん」と呼びかけている。

以上はいわば口伝であり、文献学的根拠に乏しいと言われれば、私は次の例をあげておこう。峠三吉が生前に出した『原爆詩集』（青木文庫 1952年版）の奥付には「<sup>さんきち</sup>峠三吉」とはっきりふりがなをつけている。

- 3) この稿を書き上げてから、私はこの目録を入手した。『峠三吉資料目録』平成3年3月31日広島市立中央図書館、206ページ、50部印刷、となっている。
- 4) 増岡がこの出来事を忘れてしまったわけではないことは、『作品集』下の年譜ではこのことを記していることでも明らかである。
- 5) 峠の詩はドイツ関係では私の知るかぎり、少なくとも5通りの訳で紹介されているし、その中のひとつは歴史の教科書に採録されている。